

## F-9 異邦人として

### 685. ユーラシアン

ヨーロッパ人男性と現地女性との混血児は「ユーラシアン(Eurasian)」といわれる。ヨーロッパとアジアの合成語である。「欧亜人(日本語)」「ハーフカスト half-caste(英語)」「リップラップ(オランダ語?)」も同じ意味である。「インド(Indo)」も混血児の意味<sup>1</sup>の俗称であるが、蔑称の意味合いがあるようだ。

ケープタウン経由の帆船であった頃に女性を同伴しうるのは限られたトップ層であった。ヨーロッパから女性が不自由なくアジアに来られるようになったのは汽船の就航とスエズ運河の開通以降である。それまでの絶対的な女性不足の中で植民地在任中のオランダ人が現地妻と一緒に暮らすのは一般的慣習であった。

ジャワの女性につかまると離れられなくなる。これにはジャワに伝わるグナグナ(guna-guna)という媚薬<sup>ひやく</sup>の効験らしい。グナグナという語感<sup>まよ</sup>は日本語のデレデレといったところであろう。ヨーロッパに帰らずに現地妻と植民地に永住する者も多かった。

ジャワ人が昇進と地位の保全のためオランダ人上司に自分の娘を提供するというパターンもあった。『人間の大地(→975)第2部』はオランダ人に献上された女性が奴隷から人間としての尊厳を取り戻す過程がモチーフとなっている。

混血児は父親の認知によりヨーロッパ人籍に属した。植民地のヨーロッパ人籍の1/3も占めたようである。しかしユーラシアンとしてヨーロッパ人と差別される存在であり、一つの社会勢力としてオランダ人と原住民の中間に位置した。中にはエルベルトフェルト(次々項)のように反乱の首謀者として処刑されたユーラシアンもあった。

反植民地意識の盛り上がる初期段階ではユーラシアンが反ヨーロッパ人感情から民族主義運動の主導権を握っていたこともある。植民地での最初の政党である東インド党(→289)はユーラシアンのダウウェス・デッケル(次々項)を中心に1912年に結成<sup>2</sup>された。

しかし、民族意識が原住民に燎原<sup>りやうげん</sup>の火のごとく燃え広がるにつれ、ユーラシアンもスチュウ(stuw)グループとしての纏まり<sup>まと</sup>はあったが、政治の舞台への登場の余地はなくなった。むしろ独立戦争の際にオランダ側に組する状況<sup>3</sup>に追いやられた。

インドネシア独立後はかなりのユーラシアンはオランダ人とともにインドネシアを去ったが、残ったユーラシアンの方がはるかに多い。インドネシア政府高官など上流階級の夫人にけっこうユーラシアンがいるというのが実感である。

ところで現地人男性とヨーロッパ人女性の逆の組み合わせによる結婚もありうる。アブドゥール・ムイス著『西洋かぶれ』は現地人の男性がオランダ女性と結婚することによって現地人から脱出できると考えた。しかしこの結婚は植民地社会の中でどちらの社会からも疎外されて破滅の道をたどらざるをえなかったというのが小説の結末である。

<sup>1</sup> ちなみに日本語でいうインド人は外国語では Indian であり、Indo とは区別される。

<sup>2</sup> 東インド党の党員の8割はユーラシアンであった。当局は団体として承認しなかったので1913年に解散を余儀なくされた。後継団体としてインスリンデ(Insulinde)が結成され、実質ユーラシアンの団体として機能した。

<sup>3</sup> インドネシア人の会議に中国人や欧亜混血児(ユーラシアン)が同席することがなくなったことは日本軍政が与えた心理的影響がある。日本軍政は欧亜混血児を敵側人物として峻別した。⇒首藤もと子『インドネシアーナショナリズム変容の政治過程』

## 686. 現地生まれのオランダ人

植民地時代のインドネシアを研究したファーニバル(→472)は“複合社会”という概念を発表した。複合社会というのは異なった社会秩序が互いに分離したままで並存して同一の政治単位を形成している。即ち最上層に白人社会、中間層に華僑を中心とする外来東洋人社会、最下層が原住民社会であり、これら社会間の融合はなく共通意志もない。英国植民地では典型的な複合社会であったのに対してラテン系植民地では複合社会の構造が弱く、オランダの東インド植民地は複合社会であるが、英国と比べるとややラテン系であった。

第二次世界大戦前に 25 万人のオランダ人(ユーラシアンを含む)がジャワ島にいた。この数はインドの英国人と同じである。地域の広さを勘案するとジャワ島におけるオランダ人の密度は高い。

一般にインドにおけるイギリス人は任期を終えると英国に帰ることを理想とした。また、子供の教育にあたってイギリス人は故国で受けさせるか、英国から保母や家庭教師を連れてきた。一方、オランダ人はジャワで骨を埋めることは有力な選択肢であった。

現地生まれの現地育ちのオランダ人両親の子供が多かった。彼らにはバブ(babu)という専任の子守りがつき誠心誠意、献身的に育てた。乳母は子供のベッドの側にマットをひいて寝た。子供はジャワ語の子守唄を聞きながら成長した。この結果、乳母の精神的影響でユーラシアンと同じ心情になる者もいた。教育を受けするためオランダの学校に入学しても親の祖国に馴染めずに帰国する者が多かった。

一般に現地生まれの現地育ちのオランダ人はユーラシアン(前項)に対する優越感が生きがいである。そういう人間ほどオランダ生まれの新参のオランダ人に対するコンプレックスがひどい。オランダから来た官僚が開明的政策を行おうとしても現地育ちのオランダ人勢力の抵抗の壁が強固であった。

蘭領東インドの経済発展に伴い、多くのオランダ人が故国からやってきた。しかしオランダは小国であり人材の供給には制約があったため、必ずしも純粋のオランダ人でなくてもヨーロッパ人であれば植民地では一級国民としての特権を手に入れた。

これらの国籍不明の白人にユーラシアンが加わり、リタイアしてもそのままジャワに留まり生涯を終える人も出てくる。東インド生まれの白人も増えてくる。彼らにとって元の国籍は意味がなくなり、自らを“東インド人”と称するようになった。オランダに対して東インド・ナショナリズムが根付いており、反植民地意識の高揚に伴いオランダと対等な関係で連邦形成を意図した政治活動もあった。

南アフリカ共和国は最後まで黒人差別を国是に掲げたため世界から爪弾きつまはじにされた。南アフリカの内幕はボーア人というオランダ系白人の存在がネックであった。頑迷固陋なボーア人にインドネシアからの移住した少なからぬオランダ人がいた。第二次世界大戦後、インドネシア独立で全てを失った苦い体験が南アフリカでその二の舞をさせないという頑なな姿勢をとらせた。

## 687. エルベルトフェルト事件

「エルベルトフェルト(Erberfelt?-1722)」はドイツ人の父親とタイ人の母親の間に生まれた混血児、即ちユーラシアン(前々項)である。



彼が父から相続した私有地が東インド会社の総督の私邸に隣接していたので会社は土地の売却を求めたが、エルベルトフェルトは拒否した。東インド会社は手続き上の不備に乗じてエルベルトフェルトから問題の土地を没収した。エルベルトフェルトはそれを恨み、東インド会社の悪口をふれまわった。1721年12月、バタビアでは何者かが会社に反乱を企てているという噂が広まり、エルベルトフェルトが捕らえられた。

取調べの結果、彼とジャワ人の貴族、スンバワ人の共同謀議があったとして有罪になった。エルベルトフェルトの反乱の計画がどの程度の具体的ものであったかは明らかでない。粘着質性格者の口先だけの大言壮語のようなものでなかったかと推測されている。

しかし会社当局がエルベルトフェルトに課した刑は特異なものであった。刑は死刑であるが、死後その頭蓋骨に槍の先で貫いた形で塀の上にさらし、周りに家を建てたり草花を植えることを禁じた。日本の占領時まで200年以上にわたり頭蓋骨は晒しものにされていた。その後、石碑になってプラサステイ墓地公園<sup>4</sup>に保存されている。

ユーラシアンである者の裏切りに対しての執拗なパフォーマンス<sup>5</sup>はユーラシアン階級に対する見せしめの意図であろう。



「ダウウェス・デッケル(E. F. E. Douwes Dekker1879-1950)」はユーラシアンの民族主義者である。『マックス・ハーフェラー』の著者ミュルタテュリ(→970)は大叔父にあたる。第一世代の民族主義者としてデワントロやチプト・マンゲクスモと東インド党(→289)を結成し、オランダの植民地支配に対して解放運動を唱えた。

植民地政府がダウウェス・デッケルに対し特に厳しく投獄や追放を繰り返したのはユーラシアンであるがためであった。そのため彼のオランダ憎悪がさらにエスカレートし、南方に並々ならぬ関心をもって国際舞台に登場した日本への期待に傾斜した。

最後にデッケルが逮捕されたのはタムリン(→294)と同じく、日本が太平洋戦争に突入する前の1941年1月である。タムリンは拘禁中に不審死で死んだ。デッケルは殺されなかったが、日本の占領に先立ちわざわざ南米の当時オランダ植民地であったスリナム<sup>6</sup>に送られ、そこの黒人用牢に投獄された。

<sup>4</sup> プラサステイ墓地公園(Taman Prasasti)は植民地時代のオランダ人の墓があるが、1942年日本軍によるジャワ攻略時の日本人兵士の墓もある。

<sup>5</sup> 植民地時代に蘭印を訪れた詩人の金子光晴が記した特異な見世物に関する散文が当時のバタビアの雰囲気をよく表している。⇒永積 昭『オランダ東インド会社』

<sup>6</sup> 南米にあるスリナム(Suriname)という共和国は元はオランダ領ギニアであった。1975年オランダ植民地より独立しスリナムと名

太平洋戦争の間、スカルノ・ハッタなど原住民の民族主義者はほって置かれたのに対して植民地政府のデッケルに対する扱いは念がいていた。ユーラシアンであるがため刑が特異であるということが 200 年前のエルベルトフェルト事件との共通点である。

デッケルはインドネシア独立後、帰国して大臣を務め、1971 年に国家英雄(→344)に叙せられたが、エルベルトフェルトはインドネシア正史において何の評価も受けていないようである。

## 688. アラビア人の末裔

イスラム教布教とともにアラビア人(アラブともいう)の東南アジアへの進出が本格的になり、インドネシア歴史に深くかかわってきた。アラビア商人は航海にも長けており、ヨーロッパ勢力が進出前のインド洋はアラビア人の海であり、香料貿易はアラビア商人の掌中にあった。

アラビア人はイスラム教を受け入れた東南アジアの住民の尊敬を受けた。イスラム教の聖所メッカの所在する地の民だからである。特に“サイイド”という称号を持つ者は予言者ムハンマドの子孫であるとして人々の信望も厚かった。

アラビア人のイスラム学者を王国の最高顧問に招くことでイスラム王国に箔<sup>はく</sup>がついた。アチェ王国(→257)では3代女王が続いた後にアラビア人を王に迎えた。その他にもスマトラ島やマレーシアの地方スルタン王国の歴史にはスルタンの男系血統が絶えた場合の対処として、しばしばアラビア人が王族の娘と結婚する形で王国が維持されてきた。これもアラビア人が高貴の血と考えられたからである。ただし“ジャワ至上思想”のジャワ人のアラビア人を有り難がる度合いは外島ほどではなさそうだ。

イスラム教の布教の過程でアラビア人がしかるべき役割を果たした人もいる。しかしワリ・ソゴ(→712)にアラビア人はいない。実際にアラビア人としてインドネシアへ来た人の多くはただの商人であり、アラビア商人にはインドネシア人の善意につけこむようなこともあったであろう。

インドネシアでいわれるアラビア人は「ハドラマウト(Hadramaut)人」ともいわれるように、その故郷は今日のイエメン人民民主共和国であるアラビア半島南部の高原地帯のハドラマウトである。ハドラマウト<sup>7</sup>はアラビア半島の先端であってもアラビア人であるとしてインドネシア人の尊敬を集めた。

後に副大統領となったハッタ(→443)が船でヨーロッパに向かう途中に紅海入口のアデン港に寄港した。その時の回想<sup>8</sup>にアラビア人の暴利を断罪している。ハッタには華僑への批判がないだけにアラビア人批判が突出している。

スマトラ島の田舎でのアラビア人について次のような観察<sup>9</sup>がある。アラビア人と華僑の商人がいてどちらも金貸しのようなことをして貧民を搾取している。金持ちのアラビア人はいい服装をして鷹揚<sup>おうえう</sup>にしている。体格も

乗った。面積 16 万 k m<sup>2</sup>、人口 43 万人の小国であるが、他の南米諸国とは異なるのはインド系 37%、黒人 31%、インドネシア系 15%の民族構成である。植民地時代にインドネシアからの移住民が人口の相当部分を占め、市場ではインドネシア語が聞かれる。オランダ語が公式語であり、元宗主国オランダの色彩が濃いという点においてスペイン系の近隣国とは文化が異なる。

<sup>7</sup> ハドラマウト人はハドラミーともいう。アルカイダで知られるイスラム過激派の指導者ビン・ラデインの父親はハドラマウト出身である。

<sup>8</sup> ハッタ自叙伝からの引用「この島の背後にあるアラビア半島にはインドネシアに来ているアラビア人の生まれ故郷、ハドラマウトがある。この地の風土とオランダ領東インドで商人稼業にいそしみ 10 日で 1 割 2 分の利子をとっている一部アラビア人の行いを結び付けて考えざるをえなかった。オランダ領東インドにいるこのような人々が偉大なる預言者ムハンマドの末裔なのだろうかという疑念がわいた。」

<sup>9</sup> ⇒古川久雄著『インドネシアの低湿地』

よく目鼻のほりが深い容貌は威圧するような雰囲気があり、異境の地で王様のように振る舞っている。

一方、華僑はみすぼらしい服装で汚い恰好をしている。アラビア人と華僑とどちらが嫌われるかといえば華僑である。金があるにもかかわらず貧乏たらしい恰好であくせくと働くのは許せないという理由らしい。

アラビア人はインドネシアに同化<sup>10</sup>しているが、名前にアラビア人の痕跡をとどめている。独立戦争の際にアラビア人はインドネシア人と一緒に戦った。同じイスラム教徒という触媒は同化促進作用がある。

## 689. インド人の血脈

人種としてのインドネシア人は東のパプア系を除いてモンゴロイドに属する。ジャワ島とかスマトラ島あるいはスラウェシ島の各民族は文化の相違であって人種的には同じであり、容貌だけから民族を推測することはかなり困難である。

民族とは文化的なものであるが、あえて人種的容貌と民族を関連づけるならば、相対的にジャワ人は柔和で小柄であり、スマトラ系の民族は精悍で大柄である。多数のインドネシア人に出会っているうちに文化的な雰囲気では何民族か見当つくようになる。特に名前は有力な出身民族判定のより所である。

また容貌から少しでもコーカサス人種的なもの、即ちインド的なものを感じとればスマトラ島出身者であろう。その理由はインドとインドネシアの間には有史以前からの交流である。インドでスマトラ島は金に産地として知られており、『ラーマーヤナ』と『マハーバラタ』を携えて彼らは渡来して来たであろう。インドに最も近いスマトラ島に数千年の交流が血が濃いのは当然であろう。マラバールやコロマンデルなど南インドのクリン人<sup>11</sup>がスマトラの歴史に関わっていたと考えられる。

さて今日のインドネシアでインド系住民といわれるのはオランダ植民地時代以降のインドからの移民である。その数は 3 万 5 千人程度と推測されており、華僑と比べるとはるかに少ない。ジャカルタのパサル・バル(Pasar Baru)にインド系商人が多く、繊維関係に従事している。神戸在住のインド商人も繊維関係である。

インド人も多様でありインドネシアには多くのグジャラート人<sup>12</sup>がいる。コーカソイドで体格が大柄で肌の色は白い。宗教はイスラム教とシーク教である。グジャラートはインドの西北端のパキスタンに隣接する地域である。古くからのインド洋の海上交通の中心地であり、商人は海外に進出していた。早くからイスラム教に改宗してイスラムの先駆者としてインドネシアへやってきた。

インドネシアではアラビア人は尊敬されている。中国系住民はいくら経済においても成功しても宗教、文化で異端視されている。インドネシアの異邦人の中でアラビア人と華僑の中間に位置するのがインド人であろう。

スマトラ島の対岸のマレー半島ではゴム園労働者として大量のインドからの移民がマレー半島に来た。英国の植民地であったマレーでは同じ英国植民地のインドからの労働力に依存したからである。ゴム園労働者

---

<sup>10</sup> インドネシアのアラビア系の人口は 15 万人程度と推定されている。移民3世代になりインドネシア同化しているため母語はインドネシア語である。政界や官界で頭角を現す者もいる。政界のアミン・ライスはアラビア系であり、官界では外務省にアラビア系が目立つ。

<sup>11</sup> 南インド出身者を総称するクリン(Keling)人なる用語はマレーシアで使用される概念で本家のインドにはクリン人という用語は使用されないらしい。

<sup>12</sup> グジャラート(Gujarat)人は古くから海外進出を行い、東アフリカ、米英のインド人のほとんどはグジャラート人である。インド独立の指導者マハトマ・ガンジーはグジャラート人である。グジャラートにはイスラム教、ヒンドゥー教、シーク教が混在するため宗教問題が複雑である。

の多いマレーシアのインド人はタミル出身のドラビダ系民族で色は黒く小柄であり、多くはヒンドゥー教徒である。今日のマレーシアではインド系住民の人口比は1割を占めている。

インド本国の民族構成が多様であるようにインドネシアにいるインド系の人々の出自も多様であり、グジャラート人とタミル人の間に同国人意識はほとんどないであろう。

⇒981.底流のインド文化

## 690. ブタウィ人

ポルトガル時代(→270)に奴隷として連れてこられ、キリスト教改宗によって解放された元奴隷はマルディジュケル(→166)と言われた。東インド会社(→272)時代のオランダ人はバタビアでの生活に家事使用人の人手を要した。その人手を敵対する地元のジャワ人やスンダ人に求めるわけにはいかない所以他所から奴隷を連れてきた。始めはインドやビルマからであったが、奴隷の調達先は領域内のバリ島やスラウェシ島など東インドネシアに広がった。奴隷も時代の変遷で解放されバタビアの郊外に居住し園芸を行った。

バタビアの発展とともにジャワやスンダの村から移住してきた農民もバタビアの郊外に定住し、街に果実や野菜を供給するようになった。奴隷や原住民の子孫がバタビアの郊外に居住し、さらに混血することで民族の子孫は世代を経る毎に現地化が増した。

数世代にわたり混血し、西欧や中国など外来文化の影響も受けた独自の文化を持つようになる。都市経済に直結した商品生産を行う農民はジャワ人やスンダ人の稲作農民とは別の階層を形成し、ブタウィ人「オラン・ブタウィ(Orang Betawi)」と呼ばれた。ブタウィはバタビアの現地読みである。オランダ植民地時代の1930年のブタウィ人の人口95万人という調査<sup>13</sup>がある。宗教はイスラム教徒が多い。

言葉は共通語としてムラユ(マレー)語を話したが、ジャワ語やスンダ語・中国語などの語彙がかなり取り入



Ondel-ondle

れられたブタウィ語<sup>14</sup>であった。インドネシア語の家元はリアウのマレー語である。しかしマレー語のインドネシア語化の過程にはブタウィ人が参画した。女性衣装のクバヤ(→781)などイン洋折衷文化もブタウィ人の所産である。

バタビア郊外で生まれて育った子供のアイデンティティは親よりもさらにバタビアに帰属する。これらの子供は《ブタウィ子(Anak Betawi)》といわれる。日本でいう《江戸っ子》と似ている。江戸っ子文化の担い手は下町の職人階級であったのに対してブタウィ子文化は市の周辺部の園芸農民であった。「オンデル・オンデル(Ondel-ondel)」という魔よけ人形やレノンという芝居など独自の文化を創出した。

彼らの居住地はバタビア郊外に散在しているが、南郊外のチョンデット(Condet)がオラン・ブタウィの本拠地といわれる。ブタウィ料理などもある。ジャカルタの爆発的拡大による都市化の波に洗われてブタウィ文化が危うくなったのでスレンセン・サワ地区がブタウィ文化の保存地区に指定された。

<sup>13</sup> 現在のブタウィ人の人口はジャカルタに2~3百万人と言われる。

<sup>14</sup> ブタウィ語はマレー語系統に分類されるが、ジャカルタ方言ともいわれる。「ブタウィ語・インドネシア語辞典」がある。⇒加納啓良『インドネシアを齧る』

野菜や果実(サラックが名物<sup>15</sup>)を生産していた土地が住宅地になり大もうけしたブタウィ人に対して怠け者の地主や家主としてジャカルタ市民からは妬まれている。

倉沢愛子著『ジャカルタ路地裏フィールドノート』にかつてブタウィ人の地であった地域が都市キャンピングに変遷中のレンテン・アグン地区の生活体験が述べられている。

今日もインドネシアの首都ジャカルタはスマトラ島などの外島からの移住者が集合するインドネシア全民族の坩堝<sup>るっぼ</sup>である。そこで生まれる子供は今更ブタウィ子でもないので「ジャカルタン(Jakartan)」という言葉に置き替わりつつある。

## 691. マレーシアへの越境者

2001年、マレーシア当局に検挙されたインドネシア人不法労働者 2500名の強制送還について両国の大臣が出席して引き渡しのセレモニーがあった。さらに 2002年 8月よりマレーシアでは不法就労のインドネシア人への処罰が雇用主にも厳しくなったため、30万人のインドネシア人の帰国で国境の事務所が混雑した。

インドネシアとマレーシアの両国の関係は〈あまり裕福でない本家＝インドネシア〉と〈かなり裕福な分家＝マレーシア〉にも例えられよう。両国の長い国境の両側には本来は同じ民族が居住して勝手に行き来していたのであるから国境を設けても管理は杜撰<sup>ずさん</sup>にならざるをえない。

マラッカ海峡を挟んだマレー半島側にも東マレーシア側(カリマンタン島のサラワク州・サバ州)にもインドネシアからの不法滞在者がおり、その数は 200万人ともいわれてきた。マレーシアでは人手不足のためインドネシアからの出稼ぎは大っぴらであり、マレーシアの事業主には低賃金で働くインドネシア人がいないと困るという実態もあり、不法就労は黙認されてきた。

例えばマレーシアのゴルフ場のキャディーのほとんどインドネシア人といわれるほどであり、第三者が人相、言葉からマレーシア人とインドネシア人を区別することは困難である。インドネシア人はマレーシアへの同化は容易であり、二代もあればマレーシアの“マレー人”になれる。ジャワ人の三代目になると手入れの行き届いた庭先にかろうじて痕跡を残す程度になる。

マレーシアへの越境者にはアチェ独立運動(→436)の指導者がいた。彼らはインドネシア政府当局から厳しい弾圧を逃れるためマレーシアに逃亡した。しかしアチェ独立問題がシリアスな問題になるとマレーシアとしてインドネシアの分裂を支持すわけにはいかないので 1998年以降、マレーシアはアチェ人の不法滞在にも厳しくなった。

カリマンタン島ではインドネシア側からダヤク人(→624)などの先住民は山を越えてマレーシアに出稼ぎに行く、あるいは小舟でスラウェシ島からやってくる。

サラワク州やサバ州の州政府がインドネシアからの出稼ぎを黙認してきたのには理由がある。サラワク州とサバ州の民族構成は、①ダヤク人などのボルネオ島原住民、②マレー人、③華人からなる。州政府はマレーシア併合の 1963年当時から、マレー半島からのマレー人移住者によって母屋をマレー人に乗っ取られることを恐れてきた。州の政治覇権において主導権を持つ①ダヤク系民族にとっては、インドネシアからの越境者の方が半島からのマレー人移住者に対するよりも親近感があるのではないか。

しかしマレーシアがインドネシア人の不法滞在を黙認してきたため不法滞在者が多くなりすぎた。マレーシ

<sup>15</sup> 〈編者註〉サラクではなくランブータンであろう。この地域ではサラクを見たことがない。

ア経済の停滞から失業者が増え、インドネシア人による治安問題が悪化したためマレーシアは冒頭の強硬処置<sup>16</sup>に転じたものである。

⇒462.同族のマレーシア

## 692. オランダのアンボン人

オランダの植民地統治時代にアンボン人は支配者の側についたため、インドネシア人からは「オランダの犬」とか「黒いオランダ人」と毛嫌いされた。独立戦争においても多くのアンボン兵士がオランダ側に従軍していた。

1949年オランダがインドネシアの独立を認めた際にオランダ軍(KNIL)のもとにジャワ島に駐屯していたアンボン兵の身の振り方は大きな問題となった。時あたかもインドネシア共和国に反乱する南マルク共和国の独立宣言があり、アンボン兵は反乱軍に参加しようとした。しかしインドネシア独立を認めたオランダは国際信義上、武装したアンボン兵を渦中の地へ帰郷させるわけにはいかなかった。とりあえずオランダ支配下のイリアンに移動させて共和国に圧力をかける目論見もアメリカに監視されてままたまならなかった。

アンボン兵に残された選択は、①協定に従いインドネシア共和国軍に編入する、②除隊する、のどちらかであった。アンボン兵はどちらも拒否し、KNIL兵士としての身分の保証を求めた。オランダは武装解除の上、6ヶ月の予定でオランダへの一時移住を認めた。

1951年、35000人のアンボン兵とその家族を乗せた船はロッテルダムに着いた。オランダもアンボン人のどちらも短期間の一時的処置のつもりであった。しかし当初の半年の予定は今日まで半世紀以上も続いている。

オランダでのアンボン人には冬の厳しい気候以外に驚くことがあった。植民地ではオランダ人は支配階級であり、その下に忠実な補助者としてアンボン人が位置付けられて原住民に臨んだ。オランダへ着いたアンボン人の新発見はオランダ人の百姓やゴミ清掃人がいて、アンボン人は最下層になることであった。

故郷をなくしたアンボン人はオランダにとって歓迎されざる客であった。収容所は隔離された場所にあり、高い失業率に低い収入しか得られず不満は高まった。オランダに改善を要求するも<sup>らち</sup>があかなかった。

疎んじられたアンボン人のフラストレーションが爆発したのが、20年以上経過した1975年12月のインドネシア領事館占領事件と1977年5月のオランダ北部で列車ハイジャック事件である。実行犯は元アンボン兵士でなくその子弟である。親の世代はどれだけ裏切られてもオランダを絶対視したが、子弟は親と異なりオランダに逆らった。

彼らの実力行使は一般人の犠牲者を出し非難されたが、犯人の意図は世間の注目を集め忘れられた自分たちの存在を訴えることであった。これらの事件を契機にアンボン人の状況は改善された。ユトレヒトにマルク歴史博物館も建設された。

亡命アンボン人も経済余力のある者は数十年ぶりに故郷訪問の機会もあった。オランダでは最底辺のアンボン人も故郷では裕福なオランダ人であることに戸惑った。数十年の年月を戻すことはできず予定どおりそそくさとオランダへ帰った。

<sup>16</sup> マレーシアでは外国からの違法出稼ぎ者への対応は年々厳しくなり、2004年11月に期限を定めて、それ以降の不法滞在者には厳罰を課すことを明らかにした。30万人のインドネシア人が帰国したが、なお40万人がマレーシアに滞在していると見られている。インドネシアは津波災害などを理由に期限の延長を求めている。⇒「ジャカルタ新聞」2005/2/2

アイデンティティを求めて親の出身地を生まれて初めて見たオランダ生まれのアンボン人の青年も余計に混乱しただけであったという。⇒331.南マルク共和国、622.アンボン人

### 693. 在日留学生

インドネシア人の在日留学生には国費留学生と私費留学生がある。その他にインドネシア研究機関や企業が派遣する留学生を日本の研究機関や企業が受け入れる方法がある。

国費留学生は日本国が費用負担するもので生活費の支給、宿舍の確保も十分に満足できるものである。大学は本人希望の専門分野に応じ日本側が指定する。アルバイトの必要性もなくつつましく生活すれば卒業時に家族を招くこともできる。

インドネシアへの割り当て人数が少なく公務員に優先枠があるらしい。インドネシアと日本の大学の間の交換留学生の制度もある。何れにせよ公的な制度は試験をパスすることが難関である。これに対して私費留学生はルピアの下落、円高の影響をもろに被り生活難で勉学どころでないらしい。

日本は第二次世界大戦中には南方特別留学生(→303)の制度を設けた。戦後もインドネシアからの留学生を受け入れてきた。1960年から1965年に日本へ招聘された留学生385人は賠償資金(→362)が引き当てられたので賠償留学生といわれる。

スハルト政権当時からの閣僚で将来の大統領候補にも擬せられたギナンジャール<sup>17</sup>は日本の戦争賠償留学生の第一期生である。汚職の臭いが付きまとうのも日本との特別の関係かもしれない。欧米のビジネスマンからは“Mr.Japan”<sup>18</sup>と揶揄されている。

日本留学生は同窓会プルサダ<sup>18</sup>を結成してインドネシアと日本のさまざまな分野で民間交流の先頭に立っている。プルサダは1985年総合大学「ダルマ・プルサダ(Darma Persada)大学」をジャカルタに設立した。学生数は約2300人であり、学長は南方特別留学生出身のスキスマン・シンドゥネゴロ(Sukisman Sindunegoro)である。

1991年天皇陛下がインドネシア訪問の際にこの大学を訪問された。2008年1月の日本インドネシア国交樹立50周年記念にも秋篠宮が訪れている。

インドネシア人の出稼ぎ先は当初のイスラム教圏から日本へも向うようになった。1980年代後半に労働力不足、特に3K職場での労働力不足の対策として外国人労働者が進出し、非合法の在日滞在者の増加が問題になった。

労働省が管轄する公益法人の中小企業国際人材育成事業団(通称AIM・ジャパン)が1991年に設立<sup>19</sup>された。在日研修生という名のもとに合法の傘のもとにインドネシア人の出稼ぎ労働者である。1993年からインドネシア研修生が受け入れられ、現在約6千人の若者が研修生として日本にいる。研修生は中小企業の非熟練労働者であり1500社余りで働いた。2008年5月、日本とインドネシア間の経済連携協定(EPA)が調

<sup>17</sup> ギナンジャール(Ginandjar Kartasmita)は1965年東京農工大を卒業し、1992年エネルギー・鉱業大臣、1993年国家開発庁長官をへてスハルト末期政権の経済調整大臣を務めた。

<sup>18</sup> プルサダ(Persada)はPerhimpunan Alumni dari Jepangのシンカタンである。プルサダの支部はインドネシア各地に存在し、日本国内にも組織があるらしい。文学部、工学部、海洋学部、経済学部の4学部あるが、文学部の日本語学科の人气が高い。

<sup>19</sup> KSD財団法人中小企業経営者福祉事業団は1991年12月にAIM ジャパン(ImmJapan)を設立し、翌1992年6月には試験的にインドネシアから11名の研修生を日本に受けた。KSDの理事長を務めていた古関忠男が巨額の政治献金を行い業務上横領容疑で逮捕(2000年)された事件があった。

印<sup>20</sup>され、インドネシア人看護師が日本で働けるようになった。

インドネシアからの労働者は長野県や茨城県に多いらしい。各地のインドネシア人は休日には上野公園に集まり、情報交換になっている。帰りに御徒町のアメコでサンバルやトゥラシなどインドネシア産の調味料(→765)を買って帰る。

## 694. 東ティモール難民

1999年1月、ハビビ大統領は東ティモール政策の変更(→430)を打ち出し、独立の実現が可能であることが明らかになり、インドネシア統治時代に難民となってオーストラリアやポルトガルに亡命していた東ティモール難民が祖国に戻ってきた。

しかし東ティモール独立は新たな難民の始まりであった。東ティモールの独立を恐れてジャワ人・ブギス人などの移民が東ティモールから一斉に脱出した。東ティモールが独立した場合、移民を保護してくれるインドネシア国軍はいなくなるからである。

1999年8月の独立の是非を問う国民投票が近づくと東ティモールは騒然として投票自体が危ぶまれた。投票を円滑に実施するため国連から監視団が派遣された。治安が悪くなったのは併合派といわれる独立反対派の民兵が投票の実施を妨げようとしたからである。

インドネシア併合以来30年の歴史は東ティモールの住民の中にインドネシア併合を受け入れる階層を作り出していた。インドネシア国軍はこれらのインドネシア併合派住民に民兵として武器を持たせ、独立派を弾圧してきた。

投票は国連監視下で行われ、独立派が80%近くを獲得する圧倒的多数であった。この結果に憤怒した独立反対派によって暴動が引き起こされ焼き討ち、殺戮が相次いだ。民兵の暴走といわれるが、インドネシア国軍の出先が陰で支援したらしい。

インドネシアへの残留を望む独立反対派に対してインドネシア国軍が武装解除などの強硬手段がとれなかったのはそれまでの国軍と民兵の腐れ縁である。インドネシアに治安維持の能力がないとの判断から国連からオーストラリアを主力とする治安回復の軍が派遣され、西ティモール(→221)のアタンブア(Atambua)に難民受け入れキャンプを開設した。

東ティモールから27万人が西ティモールへ逃げた。その難民は2つに大別される。第一のグループは独立支持派であるが治安悪化のため緊急避難した人々である。彼らは東ティモールの治安が回復するとともに東ティモールに戻った。

もう一つのグループの独立反対派約10万人が西ティモールに残った。彼らはインドネシア支配下の東ティモールで地位を築き、民兵として住民を弾圧してきた前歴のため戻るにもどれないグループである。

西ティモールに難民として残った亡命ティモール人民兵の問題は彼らが武装していることである。そして彼らは東ティモール独立を妨げるための挑発を広言している。インドネシア国軍が武装を解除しない限り、ティモール島に平和はありえない。

<sup>20</sup> 経済連携協定(Economic Partnership Agreement/EPA)とは自由貿易協定と異なり、ただ単に関税を撤廃するなど、通商上の障壁を取り除くだけでなく、締約国間で経済取引の円滑化、経済制度の調和並びに、サービス、投資、電子商取引等、さまざまな経済領域での連携強化・協力の促進等をも含めたものを言う。インドネシアとのEPAでは看護師の導入が目玉であった。国会批准で手間取るフィリピンにさきがけインドネシアが最初となった。

## インドネシア専科

果たして2000年9月には武装した民兵が西ティモールのアタンプアの国連難民事務所を襲い、職員3名を殺害する事件があった。失う物のない民兵にとって疎ましい存在の国連に対する自暴自棄の行為であった。

インドネシアは世界の非難をあびた。インドネシアは“鬼っ子”10万人の武装解除と彼らの安定した生活手段の確保という課題を負っている。

⇒[431.東ティモールの独立](#)